泉下の住人

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泉下の住人

【Ｎコード】
Ｎ２６６５Ｄ

【作者名】
都神紗茅

【あらすじ】
【泉下……あの世のこと】ある日、蘭の携帯にかかってきた謎の男からの電話。それは「工藤新一は死んだ。二度とあなたに姿を見せることはない」と言うものだった。バッドエンド必至の作品です。嫌悪感や抵抗感のある方は、一切読まずにスルーされることをお勧めします。

零：濫觴（前書き）

濫觴（らんしょう）……物事の始まり

零：濫觴

漆黒の闇に包まれていたこの部屋に光が射したのは、いつぶりであろうか。自然の音と景色から隔離されて闇に慣れすぎた彼でも、気がおかしくなりかけていたところであった。

「待ちわびたぞ。この瞬間を」

彼は防音壁の小さな穴に指先をねじ込ませて、全身の力を思いきりそこに集約させた。彼にはその痛みまでもが、自分を祝しているように感じられた。爪と皮膚のあいだに木屑が入りこんでも、何も気にならなかった。

それどころか、彼は背を反らせて腹の底から大笑いし始めた。

彼は今、室内の暗闇に溶けてしまいそうな濃紺のスーツを身にまとっていた。靴は、新品の黒色の革靴を履いている。そして、短すぎず長すぎない、さらさらとした黒髪を持っている。そのような身なりから、多くの人間に彼は新入社員なのだろうと見間違われてきた。

そんな彼は、いつ自分と言うものを忘れてしまったかも全く覚えていなかった。かつて光の下で生きていたと言う事実さえ、彼の記憶の中にはほとんど残っていない。

今の彼の目の前にあるのは、ただただ大事（おおごと）を独りで成し遂げたと言う喜びだけ。

笑いがやっと彼の顔面から剥がれ落ちると、さっきとは一変、悪魔と例えうる表情がしゃしゃり出た。順を追って彼は壁からそっと

手を離し、視線を斜め後ろへとゆっくり流した。
それから彼は体ごと向きを変え、三歩ほど進むと立ち止まった。そして目の前にある、今となっては原形を留めていないもの――それにまとわりつく冷たい管を、順を追って外していった。
彼がそのように管を丁寧に剥がすのは、思いやりと言う生ぬるい感情からではない。そう扱わないと、甦ってしまうかもしれないからだ。

何分もかけてやっと外し終えた管を脇に抱えながら、彼は空いている手を『それ』の真上にかざした。

「目を覚ませ。お前の出番だ」

彼の囁(ささや)くような言葉と共に、かざされた手が左右に揺らめく。ある一ヶ所に集中してそれは動き続けた。
しばらくしてから『それ』が、ぴくりと一瞬震えた。そして、ゆっくりと目を開いた。

零：濫觴（後書き）

他の連載作品で軽く行き詰まったので、それらとは（かなり）対照的な話を投稿させていただきました。バッドエンドには前々から挑戦したかったと言うこともありますが……。この話は大体十話以内に収まり、他の作品よりも早く完結を迎える予定です。

壱：危惧（前書き）

危惧（きぐ……成り行きを心配し、恐れること）

壱：危惧

朝とは違う赤色をした空に浮かぶ巨大な光源は、今日の終わりを告げる。
この世界に存在する自然や建物など、殆どのものは光を受けて一日の終末を悟る。
それらをまた、反射した光として他のものへとどんどん伝えていく。
地上に住むことを許された人間も、その一つである。

「あ、園子！」

「蘭じゃない。ちょうど良かった、一緒に帰ろ」

帝丹高校の正門から歩き出したのは、蘭と園子。
二人の奏でる革靴とコンクリートの地面が触れ合う音は、あっという間に街の喧騒に紛れ込んでいく。
蘭と園子の二人、もとい、喧騒の中にいる人間は気づくことができない。
景色に溶け込めて陽の光を浴びられると言う、平凡な人間でいられることがこの上ない幸せだと言う事実に。

「ねぇ蘭、この前できたばっかりの駅前のクレープ店に寄ってかない？　あそこ、結構美味しいって評判いいみたいなんだけど」

「いいよ！　わたしもずっと行ってみたかったから」

交差点の歩行者信号が、全て青に変わる。
蘭と園子は、他愛ないおしゃべりをしながら、駅前に行くために横断歩道の上を歩き始めた。
道路の向こう側からも人波が押し寄せてくる。皆様々な事情を抱えているようであるのだろう、笑顔で誰かと電話している人もいれば無表情で無気力の人もいる。
そんな中、彼女たちのいる方の人波と向かい側のそれが、音を立てずにぶつかり合った。
皆綺麗に波の一つひとつを抜けていく。
蘭は、そんなすれ違った波の中にいる一人の男と視線がかち合った。
その男は、濃紺でしわのない新しそうなスーツに身を包んでいて、赤いネクタイが全体を引き締めていた。そのような身なりから、帰社途中か帰宅途中かは分からなかったが、普通のサラリーマンと蘭は判断した。
誰かと視線が合うのは別に珍しいことでもなかったが、彼女は自分でもよく分からずに立ち止まってしまった。

「蘭？　どうしたの？」

蘭が園子の言葉に一瞬気を取られた隙に、男は既に姿を消していた。
視界の中を探してみても、後姿さえ見あたらない。周りには、二人を上手くよけていく人波の続きだけが広がっていた。

「ううん、何でもない」

園子と自分に向けて言ってから、蘭は何事もなかったかのように歩き出した。
そう、あれは何でもない。無理に思い込んではみたものの、やっぱり心のどこかに引っかかる気がした。

そんな彼女の姿を、男は人波の影から横目で見つめていた。

「ただいま」

言ってから蘭は、家に誰もいないことを思い出した。
小五郎は朝から町内会の旅行で、そして、コナンは――数ヶ月前に母親に引き取られてこの家を去っていった。

新一兄ちゃんはもうすぐ帰ってくるよ

そんな一言を残して。
今でも蘭は、その確信を持って出てきた言葉の強さと、それと対になっていた母親に手を引かれて離れていくコナンの小さな背中が忘れられない。
それどころか、何故かは分からないけれど、絶対に忘れてはいけないような気がするのだ。

想いを再確認して、彼女は携帯電話を取り出す。しかし、いつも通りの画面が映し出されるだけ。彼女は、こんな行為を毎日繰り返している。

新一は、未(いま)だに蘭の目の前に姿を現していない。
それどころか、ちょうどコナンがいなくなった日から連絡が一切ないのだ。
携帯電話の画面に表示される日付が一つずつ進んでいくごとに、彼女の中に生まれた疑問が確信へと近づいていく。そして、携帯電話の画面を見る習慣が無意味になりかけていた。

そんな中、彼女の携帯電話が着信を知らせた。

画面には非通知とあったが、彼女はそれまでの思考の延長上で躊躇(ためら)わずに電話に出た。

「もしもし」

『……毛利蘭様ですね？』

「え？　はい、そうですけど」

暫(しば)しの沈黙の後に訪(おとず)れたのは、期待していた声ではなかった。逸る気持ちが、軽いため息と沈んだ声となって通話口に吸い込まれていった。

我に返り、蘭は一番初めに聞くべきことを口に出した。

「どちら様ですか？」

『それよりも私(わたくし)には、あなたに伝えておかねばならないことがあるのです』

電話の相手の声は、蘭はそのトーンからして男性とは判断できたが、一切聞き覚えのない声だった。その声の特徴を強いて挙げるなら、どこにでも持ち主がいそうな、これと言って特徴のない声だと言うことだ。喋り方はとても紳士的で、胡散臭(うさんくさ)いセールスマンのようなネチネチしたものとは全くかけ離れていて、流れるように彼女の耳の中に入っていった。

そんな彼女のどこかに、相手が自分を知っているのに自分は相手を知らない、そして相手が正体を明かさないと言うことに対する得体の知れない感情が生まれた。そして、その感情が心臓へと伝わり、血と一緒に全身に染み込まれていった。

「何をですか？」

『あなたの幼馴染に、工藤新一と言う少年がいますね？』

「そ、そうですけど」

『彼はもう二度と、あなたに姿を見せることはありません』

信じられない言葉が聞こえてきて、蘭は目を見開いた。ただでさえ解読不能の感情で混乱していたから、余計にその言葉が全身に響き渡った。相手の喋り方が優しすぎたから、それと言葉のギャップも後押しした。

動揺を隠して、感情をコントロールしたと無理やりに思い込んで、彼女は必死に言葉を続けた。

「ど、どういうことなんですか」

『分かりました。もっとはっきり申し上げましょう。二度と会えないと言うのは、工藤新一が死んだからですよ』

弐：喝破（前書き）

喝破（かっぱ）……誤った説をしりぞけ、真実を解き明かすこと

弐：喝破

「嘘ですよね？　新一が、そうなったなんて」

”死んだ”と言う負の動詞と新一を結びつけたくなくて、蘭は代名詞に逃げ込んだ。

そんな彼女の心情を察しようともせずに、相手は間を置くことなくすぐに言葉を発した。

『愚問ですよ』

柔らかい敬語である相手の口調と、言葉の語尾についてきた含み笑いが蘭の心臓の鼓動を余計に早める。

感情の器（うつわ）が空っぽと言うわけでもなく、それでもその言葉から憐憫の念を感じることはできなかった。

携帯電話を握り締める手に汗がにじんで、彼女は沈黙の中でそれを持つ手をさっと取り替えた。電話口から、相手の声が続けて聞こえてきた。

『人は、それが如何（いか）に素晴らしく人類に貢献した者であったとしても、いつか必ず死を迎えます。彼のそれが、あなたより少しばかり早かっただけのこと』

「第一、あなたはどうしてわたしや新一のことを知っているんですか。名乗りもしないで勝手なことを言わないで下さい」

蘭が最初に言うべき言葉で相手をやっと妨害すると、その場は再度沈黙の時を迎えた。肩で大きく荒い息をしながら、全身が震えないように、そして力が出ていってしまわないように必死でその場に立っていた。少しでも油断をしたら、今にも床に座り込んでしまいそうだった。

そんな彼女をたしなめるように、相手はやっと口を開いた。

『ああ、そう言えば、私のことをまだ何も教えていませんでしたね。私は――そうですね、泉下の門番とでも申し上げておきましょうか？』

「せんかの……もんばん？」

蘭の今の思考回路では『泉下』の漢字の綴りが、どんなものなのか全く解明できなかった。

門番の言葉をそのまま繰り返した言葉に、門番本人は相槌を打つと、更に続けた。

『何故に私があなたと工藤新一を知っているかは、順を追って説明します。今一気に申し上げれば、あなたは混乱してしまうでしょうから。その経緯も勿論でしょうが、私があまりにあなた方のことを知っていると言うことにもきっとね』

「でもわたしは、新一が生きているって信じていますから」

門番に負けるものかと、蘭は強気にそう言い放った。自然と携帯電話を握り締める手にも力が入った。
そう彼女が言ってから、電話の向こうからは何も声が聞こえなくなった。耳を押し当てても、電波か何かによる雑音しか分からなくなったのだ。
門番が自分の声に怖じ気ついたのかと蘭は勘違いしたが、それは次の門番の一声で打ち砕かれた。

『では、あなたは工藤新一の何を信じているのですか？』

蘭は自分を試そうとしているような門番の質問に戸惑ったが、絶対に負けるまいとすぐに口を開いた。

「新一の言葉です。あなたがわたしと新一のことをどこまで知っているかは分からないですけど、絶対に帰ってくるって約束してくれましたから」

『帰ってくる？　どこからですか』

「事件の調査からです。知っているかもしれませんけど、新一は探偵で、その事件が解決しないから、いなくなっているだけです」

その言葉を噛み締めて、蘭はそれが事実なのだと自らに言い聞かせた。現実と夢の曖昧な境目から抜け出すための呪文として。
やっと言い切れたと安心していた彼女に、門番は一つの大きなた

め息を返してみせた。そして、そこから一拍置いて言葉を発した。

『どこまで知っているのか、と。私は工藤新一が探偵として活躍していたことも、あなたの前から姿を消してあなたを待たせていたと言うことも知っていますよ』

「！」

電話口でもはっきりと分かるほどに動揺した蘭に構わず、門番は続けた。

『そして、あなたの言葉でまた一つ分かりました。あなたが工藤新一を何も分かっていないとね』

「……え？」

聞き捨てならない門番の言葉に、蘭は耳を疑った。わたしが新一のことを何も知らない？　そんな訳がない、新一とわたしは幼馴染でずっと昔から一緒にいたから。そう思ってみても、さらに激しく動揺する心を脳が抑制できなくなり、彼女はそれらを言葉として門番に伝えることができなかった。

『まぁいいでしょう。明日にまた電話致しますから、電源はつけておいて下さいね。消えていたとしたら、逃げたのだと受け入れますから。では、失礼致します』

蘭の都合を全く考えずに、門番は勝手に電話を切った。
画面に表示されている通話時間はそれほど長くはなかった。しかし蘭は、それはこれまでの経験で一番長く感じた。
彼女はふっと我に返って、工藤新一の携帯電話の番号を検索し始めた。焦りつつもなんとか見つけて、その番号へ発信する。幾度かの呼び出し音の後に、聞き慣れた声色なのに、いつもと違う言葉が彼女の耳を通り抜けていった。

『おかけになった番号は現在使われておりません』

弐：喝破（後書き）

パソコンから閲覧してくださっている方には申し訳ありませんが、レイアウトが第三話のみ通常版のままになってしまっていると思います。それを修正できるのは、早くて元旦になります。と言うのも、実は私は旅行のために某地域に滞在中で、元旦に自宅に戻る予定なんです。パソコンからでないとレイアウト変更は出来ないと思うので……。本当に迷惑をかけてしまい、申し訳ありません。

参：静謐（前書き）

静謐（せいひつ）……静かで落ち着いていること

参：静謐

電波にまみれた女性の声が、状況を躊躇(ためらう)うことなく伝えていく。
さっきの門番の声とはまた違った冷酷さを併(あわ)せ持っていた。
蘭は、心の中に生まれた曖昧な疑念が確かな物へと変わり始めているのを感じた。そして震える手を抑えながら、携帯電話を耳から離した。

（まだそう決まった訳じゃない。あんな知らない人の言葉なんか絶対に信じない！）

門番の言っていた、新一のことだけでなく、蘭が新一を全く分かっていないと言うこともだ。
彼女は強く自分に言い聞かせると、携帯電話の新規メール作成画面を開いた。それから急いでメールを打った。

『番号変えたの？　今すぐに電話して』

蘭は一息つくと、親指で送信ボタンを強く押した。自分の思念を地面に強く埋め込ませて、門番の言葉に負けるまいと心を構える。
次にまた電話が来ても大丈夫なように。しかし、無情にも、現実はそれをもはねつける。

メールが送信できませんでした

蘭は絶句した。自分が予想していた範疇(はんちゅう)の最悪なことが起こってしまったからだ。

液晶画面が表示する素っ気ない文字が織(お)りなす文章は、ものの数秒で姿を消した。様々な感情が入り交(ま)じっている、妙な寂寥(せきりょう)感がその場に残った。

絶対に信じないと言う言葉が頭の中に浮かんだ瞬間に、蘭は携帯電話を仕舞(しま)いこんで駆け出していた。

彼女は焦燥しているにもかかわらず、変なところで落ち着いていたために事務所の鍵を締めた。そしてある場所へと向かった。

「おお、蘭くんじゃないか。どうしたんじゃ？」

蘭の辿り着いた先は、新一の家の隣にある阿笠博士の家だ。

彼女がチャイムを押すと、間をあまり置かずにその住人の博士が出てきた。膝まで丈のある白衣を身にまとっていて、それによって大きなお腹が更に目立たされていた。

「まあまあ、今日は寒いし中に入ってくれ」

「ありがとう、博士」

朝の天気予報で、今日はこの冬一番の冷え込みだと伝えられていた。

事務所を無我夢中で飛び出してきた蘭は、手袋などの防寒具を一切忘れていたために両手でこすりあわせていた。そして、門番の言葉で心が乱れていると言うことを一番自分で理解していたこともあって、今にも座り込んでしまいそうでもあった。そんな彼女にとって、博士の気づかいは何よりも暖かかった。

「何かあったのか？」

博士は、ソファに座った蘭と向かいあって話を始めた。それと同時に、博士と彼女の間にあるテーブルの上に、哀が紅茶の入ったカップを静かに置いた。

蘭はそんな哀に礼を言うと、躊躇（ためら）いがちに話し始めた。

「博士は、新一の新しい電話番号知ってる？」

「え？」

蘭の、明らかに震えている声から紡ぎ出された言葉に、博士は目を丸くした。そんな様子を見て、彼女は直接ではなく遠回しに質問をしたことを後悔した。どうせだったらちゃんと聞けばよかったと。

新一は無事だよね？

博士は片手を顎にあてながら、何かを考えこんでいる。蘭はそんな博士の姿を見つめているうちに余計に不安が募ってきて、哀の用意してくれた紅茶を飲んだ。それを残してカップを机の上に戻そうとした時、博士がやっと口を開いた。

「新一って誰じゃ？　蘭くんの友達かの？」

博士の言葉に、蘭は目の前が真っ白になった。彼女の心の中で、頭の中で、色々なところでその言葉がリピートされる。古ぼけて壊れたラジオのように、そして、テープが滅茶苦茶に絡まってしまった時のように。

そんな蘭の様子を、博士は何が何なのか全く分からないと言った表情でただじっと見つめていた。

彼女は余力を振り絞って、博士の表情を見ないようにして反論を始めた。

「何言ってるの、博士。新一は博士の家の隣に住んでるじゃない。

わたしの幼馴染で、探偵の」

「蘭くんこそ何を言っているじゃ？　蘭くんには幼馴染はおらんじゃないか。それに、隣に住んでる夫婦は今ロサンゼルスにいるけど子供もおらんし」

蘭には、博士がきつい冗談を言っているようには全く見えなかった。自分だけがおかしいのだろうか。そんなことを思い始めて、彼女は思わず絶望への答えあわせとなる一言を漏らしてしまった。

それが、余計に物事を現実として浮き彫りにさせてしまうとも知らずに。

「博士は……新一を忘れちゃったの？」

「忘れるも何も、最初から新一なんて知らんぞ。なぁ哀くん」

真っ白と化していた蘭の中を、漆黒の喪失感が駆け抜けた。白い絵の具と水を混ぜたところに黒いそれを垂らした時のように、黒は簡単に滲んで白を支配していった。

蘭は、博士の言葉の語尾に出てきた哀にすがるような視線を向ける。

何故かは分からなかったが、彼女は哀なら分かってくれると思った。しかし哀はその蘭を救うことなくあっさりと拒み、止めの一言を口にした。

「ええ、知らないわ。少なくとも私と博士は、その新一って人の姿

を見たことも名前を聞いたこともないわよ」

それを聞いた瞬間に、蘭はゆっくりとソファから立ち上がった。視線を室内の様々な場所に動かしてから、玄関へ繋がる扉のノブに手をかけた。それを下ろす直前に、博士と哀のいる方向に振り返った。

「色々、ありがとね？」

そして蘭は、そのまま流れていくように扉の向こうへと消えていった。しばらくしてから、玄関から出ていく音が聞こえてきた。

博士と哀は、彼女を見送ることもなくその場に立ち尽くすだけだった。

参：静謐（後書き）

第四話の投稿、年内には間に合いませんでした（ー ー；）　まぁそれはともかく、あけましておめでとうございます！　今年は（も）ノロノロでも着実に更新していくつもりなので、よろしくお願いします。

肆：指弾（前書き）

指弾（しだん……非難すること）

肆：指弾

夕日が地平線の下に身を隠しかけていたため、街は黒に近いオレンジ色に染まっていた。遠くの建物の窓ガラスには光があたり、向きを変えてどこかへと行く。

限りなく黒に近いオレンジ色の影響は、街に住まう人の心にも及んでいる。道を歩く蘭もその一人だ。

（博士と哀ちゃんが新一に会ったことがないなんて、絶対嘘よ）

冷たい道路と蘭の履いているローファーの触れあう音が、コンクリートの塀に跳ね返って向かってくる。それは姿を変えて彼女の全身に染み入っていった。

周りには他に誰もいないと言うこともあって、蘭は自らの潤んでくる視界を全く誤魔化(ごまか)そうとしなかった。鼻をくすんと鳴らして、それでも家に向かって同じ速度を保ちながら歩いた。

（そうよ、絶対に嘘よ。だって、わたしが覚えてるんだから）

心の中で、その言葉を何度も呟きながら。

蘭は階段を上がり、扉の鍵を開けた。暗い事務所の中は、誰もいなくて冷えきっていた。
彼女が流されるままに灯りを点けてみたところで、その場の冷えきった空気は留まり続けたままだった。
最初からそのことを頭では分かっていたが、いざそれが現実となると、とたんに期待を裏切られた気分になった。
長くて静かなため息を一つだけつくと、蘭は事務所の扉をゆっくりと閉めた。そして室内の中央にある来客用の椅子に腰かけた。

しばらく無音に溶け込んだあと、彼女は制服のポケットから携帯電話を取り出した。まだ新たな着信もメールも入っていなかった。
一瞬だけホッと胸を撫(な)で下ろして、すぐに携帯電話を机の上に置いた。例えば今すぐに門番から着信が来ても、すぐに対応できるようにするためだ。しかし、すぐに彼女は門番が明日に電話すると言っていたことを思い出した。

（食欲ないけど、ちゃんとご飯は食べなきゃだよね。時間だって、ちょうどだし）

蘭は取り出したばかりの携帯電話を右手で掴(つか)み取り、すっくと立ち上がる。それから、空いている左手で事務所の明かりを消した。

『お見事です。インテリチーム、正解！　芸人チームも気を落とさずに次も頑張ってくださいね。それでは、次の問題です』

食事を済ませてから、何をする気が起きなくて蘭はテレビの画面をじっと見つめていた。

画面には、クイズ番組の様子が映し出されていた。個々が持っている雑学の知識を競いあうと言うものだ。そこにいる人々はみな、たあいないことを言っては笑いあっていた。

彼女は、そんな人々がとてつもなく羨(うらや)ましかった。日常に存在するありふれたぬくもりが欲しかった。

「会いたい」

蘭のぽつりと呟いた言葉は、司会者が会場を盛り上げようとして発した空回りな言葉にかきけされた。

彼女の意識は“工藤新一”を中心に回っていた。
その様子を、どこか客観的な冷たい目で見ている彼女も近くにあった。“工藤新一”に会いたいと願うのも自分で、いい加減抵抗を止めれば楽なのにと思っているのも同じ自分だった。そんな両極端な二つの思いが混在する中で、実際に行動を起こせる表面化した彼女は、ただ何もせずに中間地点にいるだけだった。

そんな時――蘭の携帯電話が、うわべだけ暖まっている空気を切り裂いた。
その画面の中央には『通知不可能』の文字が浮かんでいる。彼女は、通話ボタンを押してから恐る恐るそれを耳に近づける。

『こんばんは、夜分遅くに申し訳ありません。お分かりいただけますよね？　毛利蘭様』

「ええ。泉下の……門番さんですよね」

午前への突入時丁度に、ある意味で一日の始まりに蘭が初めて聞いた声の持ち主は、門番だった。それを聞いたのは数時間ぶりではあったが、博士と哀の一件がありだいぶ久しぶりな気がした。

『真実と向きあう覚悟がきちんとできたのですね。私は最初から、あなたの性格からして逃げることはないだろうとは思っていましたが』

門番の言葉にいち早く反応したのは「工藤新一を信じている」蘭であった。

「あなたがわたしの性格を知っている？　だったらわたしがずっと新一を信じ続けることだって分かりますよね？　あなたがどこの誰かは知りませんけど、くだらない冗談はいい加減に止めてください。……新一を、返して」

感情が全身から流れ出してきて、蘭は言葉の最後を敬語表現にすることを忘れていた。境目がはっきりしていた彼女の心は、新一を信じる気持ちが勝りつつあった。曖昧になった中間地点から躊躇(ためら)いなくそこへ両足を踏み入れた。

暫(しば)しの沈黙ののち、門番が口を開いた。

『I' ve heard enough of it』

「えっ？」

門番の流暢な英語が、蘭の五臓六腑に響き渡る。

また違った種類の闇に突き落とされて戸惑うだけの彼女を知ってか知らずか、門番は言葉を繋げた。

『そんなことはもう聞きあきた、と言う意味ですよ。第一、彼――工藤新一はあなたの所有物ではないでしょう？　工藤新一は、工藤新一自身の物ですから。あなたに返す理由は存在しませんよ』

「それはそうですけど」

言葉の隙間を突かれて、勢いで立ち上がっていた蘭は思わず椅子にもたれかかるように座った。

言葉を発した本人も分かっていた。確かに、自分には新一にある意味で干渉する権利はないと。しかし、門番の言葉を耳にして、自らの中に積み上げられていた感情が崩れるのを抑えきれなくなったのだ。

蘭のさっきまでの威勢が急激に弱まり、門番は更に言葉を続けた。

『まだお分かりいただけないようなので、はっきり言わせていただきます。あなたが生きていると信じてやまない工藤新一は、確かに私がこの手で殺(あや)めました』

門番のとどめの言葉に、蘭は目を見開き、そのまま返答することを忘れてしまった。

無言になった蘭に、門番は一言だけ残した。

『もう時間が時間ですし、改めて三日以内に電話をかけさせていただきます。では、失礼致します』

肆：指弾（後書き）

この投稿を皮切りに、他の連載作品もお届けできたら……と考えています。

伍：所以（前書き）

所以（ゆえん）……理由

伍：所以

『工藤新一は、確かに私がこの手で殺めました』

そんな言葉を含んだ門番の電話がかかってきてから、二日が経った。

その電話があった日から、蘭の頭の中ではその言葉だけが何度も再生されていた。自分で止めようと思っても、全く敵わなくて。

はっきりと彼に言われても、彼女の中には、彼は自分を騙そうとしているだけだと叫ぶ彼女がまだいた。

その一方では、門番の言葉を受け入れようとしている彼女もまた存在していた。

結果的に、蘭は何を信じればいいのか分からなくて、彼女自身の思考は無に等しくなっていた。

身の回りのことはきちんとこなせるが、彼女には常にむなしい気持ちがつきまとっている。まだ旅行から戻らぬ小五郎に対する気持ちが入り込む隙さえ、ない程に。

窓から射し込んでいる柔らかい太陽の光は、優しく蘭を包んでいる。それでもその光が暖かすぎる故に、より彼女の負の感情を際立たせていた。

そんな中で、蘭は机の上で沈黙を保っている携帯電話を見つめているだけだ。

彼女は一抹の希望をかき集めて、新一との接触を何度も試(こころ)みていた。しかしそれに繋がることは一度もなく、同じ反応が返ってくるだけであった。そのこともあり、門番からの着信を待つしか手立てがなかったのだ。

蘭は自らの無力さを改めて実感して、それでも何も変えられない自分がもどかしかった。

しばらく続いた沈黙は、蘭の携帯電話に入った着信で呆気なく終わった。

彼女がディスプレイの表示に目をやると、そこには「非通知」の文字が浮かんでいた。

「……はい」

それが留守番電話に変わる直前に、蘭は通話状態に切り替えた。思っていたよりも震えていた自分の声に、予想外の焦りが込み上げてきた。

蘭がそんな自分を押し込めると、電波に乗って門番の声が聞こえてきた。

『二日振りですね、毛利蘭様。現実を受け入れる覚悟は出来ましたか？』

門番の口調は、今までと変わらぬものだった。しかし、今の蘭にはその穏やかさが逆に恐怖を煽(あお)るもののように感じられた。

彼女は、もし自分が二日前のままならば、真ん前から向かっていただろうと思った。しかし、電話を受けた今は――真実を知りたいと言う思いでいっぱいだった。

「ええ」

彼女が言葉に宿らせた意志の強さを感じとったのか、門番は静かに話し始めた。

『私は、ある組織に所属していましてね。その組織が所有する研究所で、人間の記憶に関する研究を行(おこな)っているのです』

人間の記憶？　と反芻するように呟いた蘭に、門番は更に続ける。

『その研究の一環である実験に、工藤新一を使わせていただいたのです』

「それって、実験台にしたってこと！？　どうして新一が！　……まさか、新一が関わっていた事件って」

『反論は、私が話し終えてから受けつけます』

門番の淡々とした言葉に蘭は黙らざるを得なかった。しかし、心の中では、彼に反抗するかのように反論の文句が余計に浮かんでき

た。

『貴方の仰有(おっしゃ)る通り――実験台として、彼の記憶を調べさせていただいたのです。そうしたら色んなことが分かりましてね』

何故他人の記憶を勝手に調査できるのか、どうやって調査をしたのかなど彼女の中に疑問は多数生まれた。しかし彼女は反論と言う術(すべ)を奪われているために、携帯電話を握りしめることしかできなかった。

『彼の肩書き上かどうかは分かりませんが、他の実験台より彼の記憶は多かったのです。そんな彼の記憶の中でも、中心にいて一番の比重を占めていたのが貴方でした』

「え……？　わたしに関する記憶が一番多かった、ってことですか？」

門番の言葉を半分も理解しきれていない蘭は、与えられた情報を整理することに追われていた。そんな中で予想外の言葉が紛れてきたために、余計に混乱してしまった。

蘭は整理を大体終えて、門番の最後に付いていた言葉をやっと実感できた。その刹那(せつな)、彼女は様々な感情の絡み合った塊(かたまり)が自分を追い越した気がした。

『では、何故だと思いますか？』

突然、蘭は反応することを許された。それに加えて門番が示したのは難解な問いであった。
彼女はそれらのことがあり、少し考えてから、

「新一が、わたしを待たせていたから……じゃないでしょうか」

まるで疑問を投げ掛けるかのように、自信がなさげに言った。
門番からの返答は、それを受ける本人の思っていたよりも早いものだった。

『あながち間違いではありませんが、完璧な正解とも言えません。やはり貴方には“本当の”真実を知る必要があるようですね』

「本当の、真実？」

それは重複表現ではないのか、と蘭はつい無駄なことを思った。
彼女を焦らすように、門番は彼女の言葉から数秒間置いて、やっと口を開いた。

『工藤新一は、貴方の家にしばらく居候していた江戸川コナンと同一人物だと言うことを』

伍：所以（後書き）

他の作品に気を取られていたら、こちらの更新が滞っていました（。ロ　。；　約二ヶ月の放置状態…　　今回の更新では、あれ以上続けたらかなり長くなるのであえて、門番氏の発言で次に引っ張らせていただきました。そのこともある上、このまま行けばもうすぐ完結になるので、更新の速度を出来るだけ早めようと考えています。　　ちなみに、記憶の調査云々に関してはスルーして下さい。人がそれぞれ記憶している物事を他人に知られるわけないだろと突っ込まれたら、それこそこの話の全てが終わってしまうので……

睦：契機（前書き）

契機（けいき……ある事象を生じさせるきっかけ）

睦：契機

門番が言い放ったことに対して、蘭は何もしなかった。肯定も否定もせずに、ただただ直立不動の姿勢をとり続けた。

そんな彼女に耐えかねて、門番は言葉を繋げた。

『この空白の発生は偶然でしょうか。それとも、意図的ですか？』

「分かりません」

彼女は、自らを試している門番に反抗したわけではない。存在する事実を伝えただけである。

工藤新一＝江戸川コナンの等式は、彼女が幾度も触れることを躊躇(ためら)ってきたものだった。それ故に、過剰に驚く必要もなかった。しかし、全くそうではないとは言い切れないために、正反対の感情が互いに互いを打ち消し合っていた。

『ならば、前に私の言ったことも理解出来たのではないでしょうね』

「わたしが、新一を分かっていないと言うことですか」

蘭がそのまま続けようとした時、彼女の背後にある扉が音を立てた。彼女が携帯電話を耳に当てながら振り向くと、そこには彼女の父親こと毛利小五郎がいた。

「遅くなって悪かったな、蘭。ちょっと色々あってよ、こんなに長引くなんて予定外でなぁ」

小五郎は、深緑色のパッケージに包まれているお土産(みやげ)を手に持ち頭をポリポリ掻きながら言う。蘭は少し悩んだが、通話口を押さえてからお帰りなさい、と答えた。

彼女の言葉がそこから漏れていたのか、門番は口を開いた。

『長電話も難ですし、直接お会いしませんか』

「他の人に聞かれたら困るようなことでもあるんですか？」

門番は、蘭の冷静な反論にふーむ、と呟いて暫(しばら)く間を置いた。それから、順を追うように言葉を口にした。

『私は、貴方を工藤新一と会わせても構いませんよ。貴方がそれを望むのならば』

今度の門番に、蘭はすぐに反論をする訳には行けなかった。それでも彼女は門番に負けじと、脳から幾つかの言葉を生み出した。

「それは――新一が生きていることを前提とする話ですか？　それとも」

『貴方次第です』

自らの言葉を無理矢理に遮った門番に蘭はしめたと思った。そして、それが焦りから来るものだと勘違いしたまま、更に続けた。

「門番さんは、どうしてもわたしと新一を会わせたいですか」

『なきにしもあらずってところですね』

この状況では、蘭には新一が今どうなっているのかを知る術(すべ)がない。だからこそ、彼女は自らの目で真実を確かめようと決めた。

「じゃあ、どこへ行けばいいですか」

蘭と門番の感情が絡み合って、他者を受け入れることの出来る隙を、徐々に埋めてゆく。門番は、ゆったりとしたテンポで歌いかけるように言った。

『米花市郊外にある、米花第五倉庫にてお待ちしています。日の暮れぬ内にいらしてください』

いつもより大きな砂時計から、全て砂が落ちきった。蘭はそれを

ひっくり返すことなく、そのままで服のポケットに仕舞った。それから、カーキ色の上着を羽織って髪を軽く整えた。そして一旦部屋に行って財布などをベージュ色のバッグに入れ、それを手にまた戻ってきた。
そんな彼女に、小五郎は事情も分からぬまま聞いた。

「出かけんのか？」

「うん、ちょっとね」

「ま、あんまり遅くならねぇ内に帰ってこいよ」

蘭の偽った笑顔に気づかぬ小五郎は、それだけ言うとすぐに眠ってしまった。旅行に大分体力を奪われたようだ。そんな彼を起こさぬように、そっと歩きながら蘭は外に出た。
扉を完全に閉じる前に、彼女は彼に向かってひと言付け加えた。

「大丈夫。ちゃんと帰ってくるから」

それから扉を閉じた時、彼女は、自らの顔面から笑顔が剥がれ落ちたことに気づいた。

「やだ、何でこんなこと言ったんだろ。帰ってくるに決まってるじゃない」

居場所のない思いに、確かな恐怖感を感じた。蘭は再度、素顔に仮面を貼り付ける。
その時には既に、彼女の気持ちは真っ直ぐ前を見据えていた。

睦：契機（後書き）

この小説もそろそろ完結になります。多分、八～十二話のどこかになると思います。こっからは、ばらまいた（散らかした？）伏線を回収していかなくては……。綺麗にまとめられるように努力します！

☆余談ですが、今回更新した話の中に出てくる小五郎の台詞には、意外と苦労しました（^^；　なので、文中の小五郎の台詞で「ここがおかしい」と言うところがあれば、評価欄やメッセージ欄でどんどん突っ込んでやってください。そうして下さると助かりますm（__）m

漆：素懐（前書き）

素懐（そかい）……かねてからの願い

漆：素懐

真っ赤に燃える太陽は、地面に落ちかけている。その光を背に受けながら、蘭は徒歩で目的地へと向かっていた。タクシーに乗って来たのだが、途中から車も入れないほど狭い道になってしまったのだ。

米花倉庫は、普段から人気がほとんどない。関係者以外の立ち入りが禁じられる以前に、関係者自体も頻繁に立ち入ることはないのだ。タクシーの運転手は、この場所を指定した蘭を終始不思議そうに見ていた。彼女が料金を支払ってタクシーを降りた時、運転手は心配そうな声色で言った。

「何しにここへ来たかは聞かないけど、用事を済ませたらすぐに帰った方がいいよ。最近はこの辺りも治安が悪いからねぇ」

「はい」

走り去るタクシーのテールランプを見つめながら、蘭は上着の裾を強く握りしめた。

「だいじょうぶ」

震える自分の声だけでは不安は拭いきれない。そうではあるが、行ってみなくては分からない。蘭は、新一に会えるかもしれないという期待のみ思い浮かべた。そして、目的地へとゆっくり歩み始め

た。

米花倉庫の敷地内には、ひっそりとした空気が漂っていた。無機質な建物が変に規則正しく並んでいて、その建物同士の隙間は人一人がやっと通れるくらいであった。

「第五倉庫は……数字の『五』って書いてあるあれかな」

蘭は、自らの心臓の音がいつもより大きく響くように思えた。新一の安否を早く確認したいという気持ちと、それ自体への恐怖は募る一方である。彼の無事を強く祈ってはいるものの、もしかしたら……と考えずにはいられなかった。

少しでも落ち着こうと、蘭は乾いた空気をゆっくりと吸い込んだ。それから、目の前にある第五倉庫を見つめた。所々塗装が剥がれ落ちていて、鉄が剥き出しになっている部分は完全に錆びきっていた。

蘭は入り口を見つけるためにゆっくりとその周りを歩いた。窓は一つもなく、ただ塗装と錆のまだら模様が続くばかりだった。そして、それが途切れたのは唯一の入り口の存在だ。横に開く種類のものであり、トラックなども入れるほどの大きさであった。

息を軽く整えてから蘭は扉に近づき、二つの窪みに震える両手をかけた。この先に待っているのは何だろうか。本物の新一がいてほしいと一番に考えるけれど、やはり不安を払拭しきれない。

しかしながら、いつまでも惑っているわけにもいかない。蘭は思いきり力を入れて、扉を横に開け放った。

倉庫内は真っ暗であった。目を凝らすと、中にあるものの輪郭が何とか分かるくらいだ。蘭は入り口に立ったまま、中を見渡してみ

る。その場所からは、巨大なコンテナが乱雑に置かれていることしか分からなかった。

「いるの？　……新一」

新一を呼ぶ蘭の声は、広い倉庫の中に吸い込まれていった。返事はない。蘭は、さっきよりも自分の声が震えていることに気づかざるを負えなかった。倉庫の中にいるだけで、恐怖心がどんどん増していく。

「門番さんもいるんですよね。隠れてないで出てきてください。新一に会わせるって、言ったじゃないですか」

恐怖に押し潰されそうになりながらも、蘭はもう一度言葉を発した。門番を完全に信用している訳ではない。しかしながら、彼を信じなければこれから一切先に進めない気がする。

会える可能性があるのならば、簡単に見過ごす訳には行かない。新一に会いたいという気持ちだけが今の蘭を動かしていた。

「毛利蘭さん。ようこそ、いらっしゃいました」

不気味な雰囲気の漂う倉庫内にそぐわない、穏やかで紳士的な声が響いた。それは、蘭が電話越しに聞いたのと同じ声だった。門番は、本当にここへ来たんだ。嘘なんかじゃなかった。そんなことを

思いながら、蘭は声の主の姿を必死に目で探した。
そんな中、倉庫の奥から二つの人影が彼女の前に姿を現した。

捌：間近（前書き）

間近（まぢか）……時間・距離がすぐのところに近づいていること。

捌：間近

蘭から数メートルの地点で、二つの人影はぴたりと立ち止まった。暗かったためにあまり見えなかった各々の表情も、はっきりと見えた。

「え……？」

目の前で起こっていることに、蘭は驚かざるを得なかった。握りしめた両手の表面に嫌な感触の汗が流れていることはすぐに分かった。その割に呼吸と脈拍は変に落ち着いていた。しかしながら、そのギャップに違和感を覚える過程には至らなかった。

「私が『門番』です」

蘭側から向かって左側に立っている男性が、柔らかな口調で言った。その門番は紺のスーツに深緑のネクタイを締めていて、さらさらの黒髪であった。街で見かけたら、二十代前半の会社員だと思わせる姿である。その一方、どこかで何かが違うと思わせる要素もあった。しかしながら、蘭はそれがどこなのか分からなかった。

門番の表情には余裕を漂わせる笑顔すらあった。そんな笑顔に、蘭の心は更に乱されていく。　聞きたいことは、蘭の頭の中にぱっと浮かんだ。それにも関わらず、蘭は確信に触れないような曖昧な質問をした。真実に繋がる扉を直接開けるのが怖かったのだ。

「あの、門番さん。新一に会わせてくれるんじゃ……ないんですか？」

「彼はあなたの目の前にいるじゃないですか」

そう言って門番は、彼の左側に立っている男性に目配せをした。

「えっ？　この人は新一じゃ」

「すみません、私の表現が悪かったですね。詳しく言えば、彼は『工藤新一』の記憶の一部を以て動いているのです。ですから彼には、たとい与えられた名前があったとしても、それは過去のことで、今は『工藤新一』なのです」

「そんなこと…信じません！　その人かあなたが新一を……」

蘭は、先に続けるべき言葉を口に出したくなくて、黙りこんだ。このような状況に追いこまれても、新一の生存を信じていた。むしろ彼女自身は、その気持ちだけでこの場所にやって来て、立っている。自分で新一の生存を否定するような言葉を口にすれば、それが事実になってしまいそうで怖かった。

恐怖心と現実の狭間でさ迷っている蘭に、門番は笑みすら浮かべて見せた。

「ははは、何をおっしゃいますか。殺すだなんて勿体ないことしま

せんよ。それに、あなたとこの彼は一度会ったことがあるはずでしょう？」

「え？」

「四日前、あなたが、茶髪でカチューシャを着けた友人と歩いていた時ですよ。帝丹高校の近くの交差点だったと思いますが」

「！」

門番の言葉で、蘭は交差点にて生じた違和感を思い出した。あの日に見かけた一人の男性と、今蘭の目の前に立つ男性の姿が重なる。その男性は、感情という名のものが一切感じられぬ表情で、ただ立っているだけである。

「あなたの為にもう一度言い直します。つまりは、記憶を全て抜き取ったこちらの男性の脳に、工藤新一の記憶を入れたということです。あなたと彼を出くわさせたのは、彼の“事後経過”を見る為に行いました。これで信じていただけましたか？」

にっこりと微笑まれてしまい、蘭は本当に言葉を失った。彼女は、門番の言っていることが全て出任せであり、これからひっくり返そうと思っていた。しかしながら、彼の言葉で、疑問は全て解決されてしまったのだ。

「他に疑問はないのですか？」

蘭には、門番の口調が急に変わったように思えた。他の疑問って？と一旦考えてみる。答えにたどり着くまでに、時間はほとんどかからなかった。しかし、もう自分は新一に会えないのだといういたたまれない思いが強く、言葉を発することはできなかった。

蘭は、この人の前で泣いてたまるものか、という気持ちで涙をこらえようとした。しかしながら、簡単には行かなかった。

「どうして……どうして新一がそんなことに」

蘭の頭の中には、新一の姿が数え切れないほど浮かんできた。どうして自分の気持ちをきちんと伝えなかったのだろうなどと、後悔ばかりしていた。もうどうにもならないことと分かっていたために、彼女は流れる涙を拭うことしかできなかった。

「じゃあ、私の口から言わせていただきますよ。まず、何故私があなたに記憶の話を教えたか。そしてもう一つ、記憶を抜かれた工藤新一の体はどこへ行ったのか。そうですね？」

蘭は鼻を啜りながら、ほんの少しだけ頷いた。門番に自分の心を完璧に読まれたことの驚きを感じている余裕は、なかった。

「その疑問を一気に解決してくれる方がいらっしゃっていますよ。ほら、後ろを見てください」

門番の言葉で、蘭はゆっくりと振り向いた。涙で滲んだ景色の真ん中に、その人物が立っていた。

捌：間近（後書き）

タイトルの意味は次回の話を読めば分かると思います。という訳で……なるべく早く！更新しようと思います。ちなみに、そろそろ終焉が近づいてます。結末は予想しにくいものにはしたつもりです。でも、もし「こういう結末じゃないか？」という予想があるお方がいらっしゃいましたらこっそりメッセージ欄から作者に教えて下さいね（＾ω＾）また、パソコンから閲覧して下さっている方には申し訳ありませんが、このページのみ配色パターンが違っていると思います。後程修正致しますので、それまでご迷惑おかけしますm（＿＿）m

追記（２００９．０３．０９）
やっとこさ、このページの配色パターンを設定しなおしました。

玖：奈落（前書き）

奈落（ならく）：地獄。物事のどん底。最後のどん詰まり。

玖：奈落

蘭が見つめる先には、彼女が長らく待ち侘びた人のすがたがあった。帝丹高校の制服に身を包み、何も言わずにただ立ち尽くしているだけである。

「……新一！」

意志より先に蘭の体は動きだしていた。言葉では説明できない、様々な感情が入り乱れた状態でただ走ってゆく。涙でぼやけた視界の中でもただ一つはっきりと蘭が捉えられる人に向かって。

走り初めてから、やっと気持ちが動きだした。記憶を抜かれたなんて、やっぱり嘘なんだ。あの人たちも新一とグルになってわたしを騙しているだけよ。そんなことを自分に言い聞かせて、蘭は新一に抱きついた。

「ばかっ、どうして何も連絡してくれないのよ！　心配したじゃない……」

新一は、抱きついている蘭を引き寄せることも、その言葉に答えることもせず、やはりただ立っているだけであった。視点も定まらぬままでいる。蘭はそんな新一の様子を、全て自分に都合のいい方向に解釈する。本当に会えたんだ、会いたかった、どこに行っていたのよ、などなど言いたいことは沢山ある。これから自宅に帰りながら問い詰めてやる、とまで考えていた。

そんな束の間の幸せに包まれている蘭を、門番は容赦なく地獄に突き落とすつもりであった。彼にはまだ言いたいことが残っているのである。

「幸せですか？」

「……えっ？」

門番の乾き切った声で、蘭はようやく我に返った。余りにも先程までの声色との差に驚いたのだ。

一旦振り返って見ると、彼の顔はもはや表情のなくなった、人形のようになっていた。怒りも悔しさも恨みも、何もないただの顔面を保っている。それを見て、蘭は悪寒を感じた。下手な表情よりも冷酷で恐怖を感じさせたものであるからだ。

「やはりあなたは私が思っていた通り、愚かだ。自分さえ幸せならそれでいい。今自分が置かれている状況を全く分かっていませんね。見ていて呆れますよ」

「確かにわたしは……自分のことしか考えてないかもしれません。でも、愚かなのは門番さんも同じじゃないですか。わざわざこんなに凝った意地悪をして、人を騙したんですから」

蘭の言葉に、門番は大声で笑いはじめた。冷えきった空間にこだまする笑い声は、その場にいる全員を包んでゆく。

「何がおかしいんですか。本当に、あなたの目的は何なんですか？こんなことして、あなたに得があるんですか？」

蘭の投げ掛けた質問には答えることなく、門番は笑うのを止めて咳払いし、話し始めた。

「私は嘘など一つも言っていませんよ。工藤新一の記憶をこちらの男性に移したのも、あなたのそばにいるのが工藤新一だった男性であるということも、皆子供騙しなどではなく現実です。……ところで、あなたにはまだ言っていないことがありますが？」

「そんなことを言ってこれ以上何を」

「何で私がこんなことをし、そしてあなたに『工藤新一』だった男性を会わせたか。それは、試したいことがあったからなのです」

蘭の反論をはねのけるように遮って門番は話し始めた。

「記憶を全て抜いた人間に、ある特定のことだけを遂行しなければいけないという記憶を代わりに入れたとしたら……どうなると思いますか？」

「それは……」

その人の脳内には、自分がしなければならないことだけが記憶に『残る』ということだ。ということは。そこまで考えたが、それを口に出すことなく蘭は何も出来ずにいた。感覚としては分からなくもないが、そんなことをする意味は全く解せない。

そんな蘭に門番は微かに笑みを浮かべた。

「一つ例えをしましょう。元々賢い頭脳を持つ人がその持っている記憶をまるごと抜かれ、ある特定の人間を殺さなければいけないという記憶を代わりに入れたらどうなるか。これでもうあなたの疑問は全て解決されたと思いますよ」

蘭にもようやく分かった。何故門番がこんなにも自分に余りに多くのことを話したのか。何故新一の記憶を抜き取って他人の『入れ物』に移し替えたのか。新一は、門番の実験台にされたのだ。そして、これから自分の身に何が起こるのかも分かった。幸せですか？

あなたは愚かだ――――冷め切った門番の言葉の意味も今ならよく分かる。

蘭は自分の後ろにいる『新一』に改めて向き合う。この『新一』には、わたしを――殺す、っていう記憶だけが残っているってこと？　嘘でしょ、こんなことがあると思う？　これは悪い夢だって言ってよ。言いたいことは沢山あるが、先程とは違った意味で言葉を発することが出来ない。

混乱している蘭の背中に向かって、門番が言う。

「私が所属している組織ではある計画がありましてね。簡単に言えば、人間を操って様々なことに使うというものです。その実験の第一号として、工藤新一が選ばれたのです」

「そんな理不尽なことが――！？」

蘭は門番に再び反論しようとしたが、振り向いた時には既に彼は『工藤新一となった男性』と共に消えていた。それと同時に、後ろから冷たい金属音がした。ゆっくりと振り返って後ろを見てみると――『新一』が拳銃を構えていた。

玖：奈落（後書き）

サブタイトルを見て犬夜叉の方の奈落を想像した方もいらっしゃるかも……なんて書きながら思いました。
救いようのないバッドエンドです。どんでん返しがあるなんてことはありません。それだけは改めてここで言っておきます。バッドエンドとハッピーエンドの書き分けはきちんとしておきたいので。
次の更新は……未定ですφ（・・　；）

※パソコンからご覧になっている方には申し訳ないのですが、レイアウトはまた後程他の話に合わせ変更します。ご了承下さい。

拾：終焉（前書き）

終焉（しゅうえん）……終わりのこと。

拾：終焉

まるで時が止まっているようである。倉庫の中にいる二人の人間は、身動きひとつしない。

そんな中、その片方の女――蘭が口を開いた。

「……何考えてるの、新一」

拳銃を構えたままで蘭と対峙している『新一』は、何も言わない。表情を変えることすらしない。ただ一つの使命を果たすために、立っているのだ。

「あの人が言ってたこと――わたしは、絶対信じない」

今にも撃たれてしまうような状況の中、蘭の心は落ち着いていた。自分でもよく分からないくらいに。

『新一』が、初めて口を開いた。

「私はお前を生かしておく訳にはいかないのだ」

「嘘よ。思い出して、新一。こんなのおかしいじゃない」

その台詞はきっと、脳に無理やり植え付けられたものなのだろう。

『新一』の話す言葉は、まるで予め録音しておいたものを再生したようなものであった。感情の一切こもっていない、ただの文字の羅列だ。

蘭は『新一』の目を見据える。彼の目は虚ろだ。蘭の記憶の中にいる新一は、いつでもその瞳をキラキラ輝かせていた。推理を自慢気に話す姿も時折見せる真剣な姿も、すべてが蘭の脳裏をよぎる。

あの頃の新一はもういない――？　一瞬、蘭はそんなことを思った。

「私はお前を生かしておく訳にはいかないのだ。私はお前を生かしておく訳にはいかない……」

「もうやめて！」

何度も同じことを言う『新一』に、蘭は思わず声を荒げた。堰をきったように、頬から涙が流れ落ちてゆく。

蘭の言葉に、『新一』は拳銃の引き金にかけていた指をかすかにゆるめた。

蘭はそれを見逃さなかった。同時に『新一』へと駆け出し、その身体に思い切り抱きついた。

「……記憶がなくても、新一は新一だよ」

蘭は、自分の顔の真横に拳銃があることにも全く動じない。『新一』の胸に顔を埋め、ただただ彼がかつての彼に戻ることを願っていた。

『新一』が、再び口を開いた。

「……ろ」

「えっ？」

かすかに呟いた声は、完全には蘭の耳には届かなかった。その代わりに。

『新一』の瞳から一筋の涙が流れ、そして――

――――銃声が、響いた。

拾：終焉（後書き）

丁度いいところで切ったら思ってたよりも短くなってしまった……。
あと、感情表現とテンポはとにかく難しいですね。だらだら語りすぎてもダメですし、軽くしようとすると薄っぺらくなってしまいますし。コナンノベルズに登録してから三年以上経つのに未だに巧く書けないという（ΠΠ）

とまぁ、作者の下らん言い訳は置いておいて。

サブタイに終焉と付けながら今回は最終話ではありません。
次回、伏線もどきの回収をしかるべき範囲でして終わりという感じです。

ご意見、ご感想などなど何かございましたら遠慮なく書き込みしていってください。泣いて喜びます。

拾壱：記憶（前書き）

記憶（きおく）……過去に体験したことや覚えたことを、忘れずに心にとめておくこと。また、その内容。

拾壱：記憶

東京のとある雑居ビルの一室に、一人の男性の姿があった。黒色のスーツを身にまとい銀色のネクタイを締めた、サラリーマンのような姿だ。牛革でできた背もたれのついている椅子にその身を預け、タバコに火をつける。口から吐き出される白煙をぼんやり見つめた。そんな彼の目の前にある窓からは忙しなく歩く人々が見える。夕日が彼らを照らして、各々の行くべき場所へと急かしているようだ。

あの日見た夕日に似ている、と彼は思った。

「失礼します」

「どうだったか、あの倉庫の状況は」

彼のいる部屋に入ってきたのは、まだ三十代にもなっていないであろう新入社員風の男性だ。急いでここへやってきたのであろうか肩を上下させて息を荒げている。タバコを口にしたままの彼は、その男を訝しげに見つめる。一体何があったのだろう。そんなことを思った彼に向かって、新入社員風の男は入り口の前で姿勢を正した。

「あの倉庫には工藤新一の死体と奴の血、そして拳銃が残されていました」

「……それだけか？　奴の女はいなかったのか」

「はい。あの倉庫の中も、周辺も隈なく探したのですがいませんで

した。勿論あの倉庫は奴の死体ごと燃やしておきましたが」

「じゃあ、拳銃に付いた指紋は？」

「奴の指紋しか付いていませんでした」

タバコを灰皿に押し付けて、彼はふーっと溜め息をついた。目の前に立っている男の話で、先程まで確かに持ち合わせていた自信は根源から崩れた。自分の研究は間違っていなかったはずだと。確かに奴からは全ての記憶を抜き取り、奴の女を殺せという義務の記憶だけを脳に注入したのに。奴にはあの女の記憶がまだ残されていたのか、と思い舌打ちをして二本目のタバコを取り出した。

目で合図をした彼の元へ新入社員風の男が駆け寄る。ポケットからライターを取り出し、タバコに火をつけた。

「あの男は自分の女を守るために自分で自分を撃ったんだな」

「え、そんなことしますかね？　女を殺してしまえば自分だけなら助かるのに」

「奴にはあの女は殺せない。だから俺は奴が本当に使える操り人形になったかどうかああやって確かめたんだよ。奴の記憶を調べた時にすぐ分かったさ。奴は奴の女を一番に思っていたようだってな。女を守るためなら自分の身のことだって後回しにすると」

「その女……どうしますか？　あなたは直接顔を見られてしまったのでしょう？　それに、例の計画も――。始末した方がいいならすぐにでも向かいますが」

「すぐだ。探し出して消して来い。他人には気づかれぬようにな」
「分かりました。では失礼します」

部屋のドアが完全に閉められてから、彼は椅子を百八十度回転させ再び窓へ向き合った。
吸っていたタバコを口から離して、数ヶ月前の様々な出来事を思い返す。

数ヶ月前。彼は、組織の数あるうちの一つの建物に何者かが近づいている、という情報を手に入れた。丁度その頃は記憶に関する研究を始めて少し経った時であり、そろそろ実験台が欲しいと考えていた。組織に近づいていたのは三人だった。老人一人に、高校生くらいの男、そして小学生の女児であった。組織の幹部に自ら申し出て、彼はその中の一人を実験台に選べることになった。
建物の傍にいた三人組を皆気絶させ、それぞれに関する記憶を調査した。その結果、高校生くらいの男――つまり工藤新一が、三人の中で一番脳の強度があるということが分かった。小学生の女児が組織を裏切った宮野志保であるということも判明したが、この時の組織にとっては彼女は既に必要のない人材であった。
彼は工藤新一以外の二人の、工藤新一に関する記憶だけを消去した。そして、彼らのいた組織の建物の目の前に二人だけ戻しておい

た。こうすれば、工藤新一の行く末を疑う者も少なくなるという訳だ。知り合いがもし疑ったとしても、すぐに組織へ手が伸びることはあるまい。彼はそう考え、記憶の研究を続けてきたのだ。

彼――昨日までは、門番と名乗っていた――は、工藤新一の女こと毛利蘭のことを思い返していた。工藤新一と関わっていたばかりに、哀れな女だ、と思った。もし工藤新一と全く別の人生を歩んでいれば、もし工藤新一の知り合いだとしても深く関わっていなければ、普通に暮らせていただろうに。躊躇いなく真っ直ぐ自分を見据える彼女の瞳は、彼は嫌いだった。まるで何もかも見透かされているようで。

近くに置いてあったワインをグラスに注ぎ、一気に飲み干した。これからはどんな実験をしていこうか、グラスを握り締めながら考え始めた。

拾壱：記憶（後書き）

連載開始から約二年五ヶ月でようやく完結しました。放置に放置を重ねたこの拙作……どういう結末にしようかもずっと前から決まっていたのですが、中々更新する時間が取れなくてこんなことになっちゃっています。全部で十二話しかないのにひどいものですね（自分で言うなよ）。

今回のサブタイトルは「記憶」。拙作のメインテーマ、主題と言うべきものをここに持ってきました。いちいち意味とか書く必要もないかと思ったんですが、まぁ最初からずっとこの方式だしここで曲げるのもなぁと。どうせなら全部同じにしちゃえ！　と思った次第であります。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。それでは、失礼いたします。

２０１０．０５．０３

作者@都神紗茅

言い忘れていましたが…

タイトルの話をちょこっと。どこかに書いたかも知れませんが、泉下とはあの世のこと。つまり、泉下の住人（＝あの世にいる者）は新一のことです。蘭がこの後泉下の住人になったかどうかにはあえて触れていません。読んでくださった皆様の想像力におまかせしま

す！（作者が手抜きしたわけじゃないですよ）

２０１０．０５．０５

一部追記。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2665d/

泉下の住人

2010年10月20日19時06分発行